

学会報告

第10回富山大学看護学会学術集会

学術集会長 成瀬 優知 富山大学大学院医学薬学研究部人間科学（2）

開催日 2009年11月28日（土）

会場 富山大学看護学科棟 1 階11教室

◆特別講演

わが国のがん対策を考える：がん登録からみえること

講師 平林 由香先生

元国立がんセンター がん対策情報センター

がん情報・統計部 院内がん登録室

◆教育講演

これからのがん看護

講師 山本 恵子先生

富山大学附属病院 がん看護専門看護師

◆一般演題

1. 長期入院患者のストレスと向き合うことの意義 ～術後回復が遅延したケースについて～
富山大学附属病院 松倉 舞衣, 三日市 麻紀子

2. 患者心理と利便性を考慮したストーマパウチカバーの作成と評価

神埜 愛¹, 大場 愛², 村田 律子³

¹富山市民病院, ²富山大学附属病院, ³富山県立富山いずみ高等学校専攻科看護科

3. 開腹・開胸手術後患者の術後痛の実態と離床・満足度への影響

吉井 雅恵, 米山 美智代, 山辺 直美, 桑名 千秋

高岡市民病院 3 階中病棟 ICU

4. サイモントン療法を受けた患者の語りからみるがんに対するイメージの変化

四十竹 美千代, 若林 理恵子, 八塚 美樹

富山大学大学院医学薬学研究部

5. 化学療法患者を受け持つ看護師の不安の現状調査

島次 麻美, 松永 美樹, 浜田 和美, 片口 明美, 渋谷 美保子

富山県立中央病院

一般演題1

長期入院患者のストレスと向き合うことの意義～術後回復が遅延したケースについて～

○松倉舞衣, 三日市麻紀子

富山大学附属病院

【目的】

帝王切開後、ADLの回復が遅延した患者との関わりを通して、長期入院患者のストレスと向き合うことで、患者の苦痛が軽減した事例を分析し、その意義を明らかにすることによって今後の看護ケアに生かす。

【方法】

方法は事例研究を行った。なお事例の分析にはドロセアE. オレムのセルフケア理論を活用した。倫理的配慮としては、匿名性を守り、研究発表することにおいて、患者から文書にて同意を得た。

【事例紹介】

A氏 36歳 経産婦 前置胎盤にて子宮収縮抑制剤の点滴を開始し、24週時より室内安静にて入院管理していた。35週時、帝王切開施行。術中、癒着胎盤剥離の際に膀胱を一部損傷したため、しばらく膀胱瘻留置となった。早産にて児とは母子分離の状態となった。

術後早期から、歩行器を使用し歩行可能であったが、術後5日目、腰痛の増大がみられた。A氏は思いを表出することはなく、ベッド上にて静かに過ごすことが多くなった。看護者は少しでもADL拡大を促そうと積極的にケアに励んだ。術後6日目、抜鉤時に創部離開が発見され、そのショックからA氏は更に心を閉ざしていた。その日の午後、妊娠中からの行動制限の苦労、今までの頑張りを労った。するとA氏は涙を流しながら「産めば自由になれると思っていたのに。動けといわれるけど、体がついてゆかない。」と、今までの苦痛な思いを話し始めた。妊娠後期の約2ヶ月間、ベッド上安静を強いられ、シャワー浴は数回であり、術後も疼痛のため清拭しか行っていなかった。そこで少しでも気分転換が図れればと、主治医と相談し、介助のもとシャワー浴を実施した。シャワー浴時A氏の表情は和ぎ、その後より、前向きな言動も見られるようになった。

【事例の分析】

A氏は、4人の母親であり、年齢や発達段階から日常生活能力もあり、セルフケア能力が普遍的セルフケアおよび発達上のセルフケア要件に見合っていると捉えていた。ところが、A氏の話に傾聴することで、表出された長期のストレスと看護者が向き合ったことで、疼痛のレベル、ADL状態、また母親役割獲得状況における患者看護師間の相互のズレが明確となり、セルフケア能力を見直すことの必要性を認識した。そして対象の全体像を把握しなおした結果、不足しているセルフケアを代償し、A氏のセルフケア能力を調節したことによって、看護者とA氏の間に本来の相互作用が機能したと考えられた。

【まとめ】

今回の事例の分析・結果をふまえ、日々のケアを振り返ったとき、長期入院患者のストレスと向き合うことの意義が再確認できた。さらに、看護者の立場として考えると、看護者が捉える患者のセルフケア能力と実際のセルフケア能力にズレがあり、看護の過程において高い目標値を求めていることが、結果、少なくとも患者にストレスを与えていたのではないかと考えられる。患者と向き合い、対象の見直しを行うことで、不足を代償する部分が見えてきたことは事実であった。今後、看護者と患者相互に目標を確認しつつ、目標値を設定することによって、患者のストレスの軽減に繋がるのではないかと考える。

一般演題2

患者心理と利便性を考慮したストーマパウチカバーの作成と評価

○神埜愛¹，大場愛²，村田律子³

¹富山市民病院，²富山大学附属病院，³富山県立富山いずみ高等学校専攻科看護科

本研究は学生時代に受け持った患者が人工肛門造設術を受け、退院後の生活において「自分から発する臭いに周囲の人が不快感をいだいていないか」という精神的ストレスを抱えていたことをきっかけに取り組んだ、校内看護研究である。

【目的】

現在人工肛門補助具として消臭対策に目が向けられた製品が沢山ある背景のもと、さらにもう一步進んだ芳香での視点や美観という視点に介入し、カバーの作成に取り組んでみたいと考えた。そこで患者心理を理解した上で利便性を考慮したストーマパウチカバーを追究し、検討することを目的とした。

【方法】

①患者心理理解：研究者2名が実際に便の入ったストーマ用品を貼用して日常生活を過ごし体感した心境をまとめる。また看護学生を対象に自由記述式アンケート調査によりストーマ造設術を受けたと仮定し、生じる不安はどのようなものか調査・集計。②消臭対策を施せばパウチ外への臭いの漏れはほとんどないという仮説検証のための実験：六段階臭気強度表示法に基づき、教室内で実体験している研究者からの周囲への臭気レベル感度調査を実施。③補正具及び消臭対策品の現状検索：消臭及び外観補正対応商品の有無の検索・調査。④ストーマパウチカバーの作成：芳香による心理効果と美観をイメージした試作・実用の繰り返しによるカバーの作成。⑤カバーの評価：自由記述式アンケート調査により、繰り返し試作し、完成したストーマパウチカバーの改善点・工夫点を説明した上で、受容度調査を実施。⑥ストーマパウチカバー作成のための図案パンフレットの製作※アンケートは看護学生29名を対象。倫理的配慮として無記名とし、個人が特定できないように処理することを口頭で説明し同意を得た上でを行い、所定回収ボックスに投稿してもらう。回収率は100%であった。

【結果】

患者心理理解に取り組んだ前過程ではストーマ用品自体の改善と多様化により、臭気対策を有効に施せば周囲の人は臭気を感じない状況下であることを検証した。それにもかかわらず、アンケート集計や実体験を振り返っても心理的に臭いや外観の不安が強いことは明らかだった。しかし、ストーマ用品を取り扱う会社が多くある中で消臭用シートやパウダーは販売されているものの、外観を考慮した芳香目的のカバーの販売はされておらず、唯一他国に外観を重視したハート型カバーの製品を見つけたのみだった。そこで外観と芳香に着眼しながら利便性に富んだカバーの作成に取り組んだ結果、作成されるべきカバーの条件として、①臭いに対する不安解消のための配慮がされていることが好ましい②パウチ全体をカバーでき外観上のボディイメージの向上に繋がることが好ましい③パウチ内操作が行いやすいよう下面が開いているもの④固定があることが好ましい、という4つの理想を導き出した。需要度アンケート調査ではカバーの支持率は高く、よって考案したカバーに基づき作成方法付きパンフレットの製作を行った。

【考察】カバーの作成にあたっては患者ニーズを把握しながら、生地を選択や臭いに対する対策方法としての消臭や芳香の選択を検討し、また、より本人の生活の質の向上に寄り添えるよう一体となって作成のための助言を行うことは大切である。オストメイトの方々の継続看護の一環としてストーマパウチカバーの作成、利用に関する情報提供は有効な支援方法と考える。そして本来なら見えない・見せない部分でもオシャレをすることで心理的にプラスイメージが働き、自己概念の充足のための一歩のきっかけに繋がればより理想的である。

一般演題3

開腹・開胸手術後患者の術後痛の実態と離床・満足度への影響

○吉井雅恵, 米山美智代, 山辺直美, 桑名千秋

高岡市民病院 3階中病棟 ICU

【目的】

開腹・開胸手術後、ICUに入室された患者の安静時と体動時の術後痛実態について調査した。さらに術後痛と離床度の関連性および術後痛と満足度の関連性について検討した。

【方法】

手術当日の24時、術後1日目の6時と14時にNRSを使用し、術後痛を調査した。術後痛は、10を「最も痛い」、1を「全く痛くない」とし10段階で評価した。満足度は、5を「大満足」、1を「不満足」とし5段階で評価した。

【結果】

①24時・6時・14時のどの時点においても、安静時のNRSの平均は1点、体動時のNRSの平均は3点で、安静時に比較して体動時のNRSは高かった。

②頭部挙上90度以上に離床が進んだ16人のうち、安静時NRS1の人は14人、安静時NRS2以上の人は2人で、全く痛みを感じていない人の方が有意に離床が進んでいた。また、体動時NRSと離床度には関連性は見られなかった。

③体動時NRS1の人5人のうち、満足度5点の人は4人・満足度4以下の人は1人であった。体動時NRS2以上の人18人のうち、満足度5点の人は3人・満足度4点以下の人は15人で、体動時NRS1の人はNRS2以上の人より満足度が高かった。

【考察】

①安静時の術後痛はコントロールされているが、体動時には術後痛を感じていた。

安静時は静止臥位でいるため創部に緊張がかからず術後痛は軽減されているが、体動時は動くことによって創部に緊張がかかり術後痛は強くなる。本調査ではED挿入患者を対象にしており、EDが挿入されていることによって安静時の術後痛はほぼコントロールされていた。しかし、体動時のNRSが高いことから、EDでは体動時の術後痛はコントロールできていない可能性があると考ええる。

②安静時NRSを1にすることで離床が進む可能性が示唆された。

離床を進めるためには体動時よりも安静時の術後痛をなくすることが重要であることが明らかとなった。ED挿入患者は安静時の術後痛はコントロールされている傾向にあるが、患者によってはNRSを2～4程度の術後痛を感じており、これをNRS1レベルにコントロールする必要があると考ええる。術後痛は耐えるものではなく、積極的に取り除くことが重要であるため、ED挿入患者でも安静時NRSを1にコントロールできているか確認し、必要なら鎮痛剤を追加して安静時の術後痛をなくしていくことが必要である。

③体動時NRSを1にすることで満足度が高くなる可能性が示唆された。

体動する前に鎮痛剤を予防的に使用し、体動時NRSを1以下にコントロールできれば、術後痛緩和に対する満足度が高くなると思われる。

一般演題4

サイモントン療法を受けた患者の語りからみるがんに対するイメージの変化

○四十竹 美千代, 若林 理恵子, 八塚 美樹

富山大学大学院医学薬学研究部

【目的】

サイモントン療法は、米国の放射線科腫瘍医で心理社会腫瘍医の Simonton, O.C.により、がん患者の心理的な面への「効果的に介入する方法」として開発された。近年の研究において、肯定的な感情は体の免疫力と自己治癒力を高めることが明らかにされている。

サイモントン療法では認知行動療法とイメージ療法を核として取り入れ、がんに対する捉え方、イメージの変化によって病気の回復や治療の過程に役立てる。そこで本研究では、サイモントン療法を受けた患者1名を対象として、サイモントン療法と出会いどのようにがんに対するイメージを変化したかを明らかにする。

【方法】

対象者：A氏 50歳代 男性 平成X年上咽頭がんと診断される。ステージIVのため手術適応ならず放射線療法、化学療法施行。がんの縮小が認められ4か月後退院。その後、外来でCT、PETにて経過観察。翌年上咽頭がんの再発が認められる。前回の副作用の経験から放射線療法、化学療法希望せずサイモントン療法を含む補完代替療法を行っているB県C病院受診。C病院入院後、週2回超高度ビタミンC点滴療法、食事療法、サイモントン療法にて治療を行っている。6か月経過し腫瘍マーカーの低下が認められる。調査方法：面接にてサイモントン療法やがんに対するイメージについて自由に語ってもらい録音した。分析方法：録音記録から逐語録を作成。がんのイメージに関する部分を抽出しカテゴリー化する。その後、時間軸を設定し時間軸に沿って分析する。倫理的配慮：研究の趣旨匿名性について説明し、口頭と文書で同意を得た。なお、本研究は、対象者が入院している病院の倫理委員会にて承認を得ている。

【結果および考察】

入院から現在に至るまでのがんに対するイメージは、以下に示す5つにカテゴリー化され、さらに5つの時間軸（①がん告知後②放射線療法、化学療法中③再発時④C病院入院時⑤現在）が設定した。《》はカテゴリーを表すこととする。時間軸毎に抽出されたカテゴリー名は①がん告知後：《がんは死を意識させるイメージ》②放射線療法、化学療法中：《がんは不満、不公平さを生じさせるイメージ》③再発時：《がんはしぶとく闘う存在的イメージ》④C病院入院時：《がんは自分にとって黒く嫌な存在的イメージ》⑤現在：《がんは自分と共存しているイメージ》であった。A氏はサイモントン療法に出会ってからがんが自分を脅かすものとは捉えていない。また、がんを自分自身から消滅させたいという思いも軽減しがんと共に生きていくと語っている。がんはしぶとく、自分を死に近づけ今までのように生活できないといったイメージから、がんは自分を攻撃しない、がんがあっても自分は自分、がんのおかげでゆっくりとした時間を過ごすことができたといったイメージに変化していったと考えられる。

- 参考文献 1)Simonton OC, Matthews-Simonton S. :Cancer and stress: counseling the cancer patient, Med J Australia,1981
 2)Spiegel D, Bloom JR, Kraemer HC, Gottheil E.:Effect of psychosocial treatment on survival of patients with metastatic breast cancer, Lancet,1989
 3)Fawzy FI et. al., "Malignant Melanoma: Effects of an Early Structured Psychiatric intervention, Coping, and Affective State on Recurrence and Survival 6 Years Later,Arch Gen Psych,1993

一般演題5

化学療法患者を受け持つ看護師の不安の現状調査

○島次麻美, 松永美樹, 浜田和美, 片口明美, 渋谷美保子

富山県立中央病院

【研究目的】

化学療法施行に関わる業務中に生じる不安内容を明らかにし、マニュアルを作成、勉強会を行う事で化学療法に携わる看護師が、正しい知識を持って行動できる。

【方法】

化学療法に関わる確認から施行に至る一連の過程についての、不安内容 25 項目を使用し、アンケートを作成した。化学療法に関するマニュアルを作成し勉強会を実施した。勉強会前後でアンケート調査を実施した。

【結果】

アンケート結果をもとに質問項目を6つのカテゴリーに分類し、勉強会前後での変化を、T検定を用いて比較検討した。質問項目は、確認作業に関する不安、集中力の低下に関する不安、個人の知識不足に関する不安、有害反応に関する不安、曝露に関する不安、その他の6つのカテゴリーに分類された。結果、集中力低下に関する不安の項目以外において有意差がみられた ($p < 0.05$)。勉強会前後の比較として、確認作業に関する不安、個人の知識不足に関する不安、有害反応に関する不安、曝露に関する不安は勉強会後に減少し、集中力の低下に関する不安は増大した。

【考察】

確認作業に関する不安は、レジメンが確立したことにより点滴速度を明示した事、薬剤師とのスムーズな協力体制による薬剤指導を行えた事により減少したと考えられる。

個人の知識不足に関する不安は、各種薬剤の特徴や副作用を理解したことにより減少したと考えられる。

有害反応に関する不安は、血管外漏出時の即時対処方法やアレルギー反応、アナフィラキシーショック発生時の対処法について知識を得たことにより減少したと考えられる。

曝露に関する不安は、抗癌剤の危険性と、それを取り扱う看護師に及ぼす影響について学習したこと、看護師の自己防衛の方法を学習し、使用物の廃棄を確実に行っていけるようになったことにより減少したと考えられる。

集中力の低下に関する不安は、化学療法患者を受け持つ看護師が、ミキシング中もナースコール対応せざるを得ない状況がある為、増大したと考えられる。今後、ミキシングに集中するにあたり、周囲のスタッフの協力を得られるよう、意識の改善を図っていく必要がある。